

智慧（後半） 仏知見（ぶちけん）

正しい見方や偏見などに囚われないことが一つの智慧だと前回のお彼岸の際に書かせて頂きました。ただ、これは本当に智慧の一部ですので更にもう一つ智慧のお話をさせて頂き、「智慧」というものがどれほど幅広い意味を持つのかを実感して頂ければと思います。

前回にも書きましたが、仏教というのは「世の中の真理」というものに確かに触れていると思います。そういった世の真理に到達できるような仏様の知見を「仏知見」といいます。うちのお寺でよく読む『欲令衆』というお経文、これは法華経の重要部分を抜粋したのですが、そこには「衆生（我々）に仏知見を悟らせる為に仏様はこの世に出てきた」という文言があり、我々が「仏知見⇒世の真理を悟る、智慧」を身につけることこそ仏教が説かれた一つの理由なのだと思います。なお仏様の教えは様々ありますが、一番有名なものとなると三相（一部の仏教では三法印、または四法印）というものがあります。仏教にはこんな文言があります。

- ①「一切の形成されたものは無常である」（諸行無常）と智慧をもって観るときに、ひとは苦から厭（いと）い離れる。これが清浄への道である。
- ②「一切の形成されたものは苦である」（一切皆苦）と智慧をもって観るときに、ひとは苦から厭い離れる。これが清浄への道である。
- ③「一切の事物は無我である」（諸法無我）と智慧をもって観るときに、ひとは苦から厭い離れる。これが清浄への道である。

誤解を恐れずに意識するならば①諸行無常（世の中のものは全て変化していく）、②一切皆苦（この世は己の想いのままにならず、現実とのズレに苦しむ）③諸法無我（単独で確固たる「我」があるのではなく、全ては因果の繋がりである）と私は説明します。なぜこんな難しい言葉を持ち出してきたかという、こういった世の真理を皆様は自分で見つけられますか？と問いかけてみたかったからです。我々人には時間や経験に限界があります。皆様も10代や20代などの若かりし頃、今とは考え方が大分違ったと思います。社会に出て働き始める・家庭を持つ・子供や孫が生まれる・海外などの異文化に触れる・コロナや大震災など予期しない出来事にあう、など皆様の価値観を変える様々なことがこの世には溢れています。全てを経験できる方はいませんし、国や時代が変われば文化や価値観が変わります。果たして正しい真理を我々は見つけられるでしょうか。私は個人では難しいと思っています。だからこそ、我々には多くの時代や国で語り継がれ、なお色あせることがない大局的な真理が必要になると考えています。それは法律であったり、文化であったり、宗教だと思っています。特に仏教は世界宗教として数か国にまたがり紀元前からの長きに渡り語り継がれ、日本においては法律や文化の大元になったという実績は大局的な真理になりうるものだと思います。そして仏教、特に智慧は人だけでなく、人よりも長く続く会社や国といった物も救っていくと思います。

例えば**日本企業の社是として『三方よし』**という言葉聞いたことはないでしょうか。**伊藤忠商事の社是**として有名ですし、ホンダや住友、高島屋などにも影響を与えたと言われます。例えば伊藤忠のホームページには「初代伊藤忠兵衛が近江商人の先達に対する尊敬の思いを込めて発した『商売は菩薩の業(行)、商売道の尊さは、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの』という言葉にある」という言葉が掲載されています。先日の不正をおこしたビッグモーターの救済も損得勘定だけでなく、その陰にはこのような社是があり、他者の為にといい想いもあるのかなと感じます。

また国では、それこそ**日本が一度仏教によって救われています**。皆様は戦後、敗戦国となった日本が戦勝国からの賠償請求により、分割された植民地となりかけた歴史をご存じでしょうか。各地を六か国程度で分割する予定でしたし、東京に至ってはいくつかの国の共同管理、という有様でした。恐らく、この案が可決されていれば、今の日本はなかったでしょうし第二のイスラエル・ガザになっていたかもしれません。それを防いだのは**同じく仏教国でもあったスリランカのジャヤワルダナ大統領**です。以下、その功績を讃える碑文から抜粋・引用を致します。**【この石碑は、1951年(昭和26年)9月、サンフランシスコで開かれた対日講和会議で日本と日本国民に対する深い理解と慈悲心に基づく愛情を示された、スリランカ民主社会主義共和国のジュニアス・リチャード・ジャヤワルダナ前大統領を称えて、心からなる感謝と報恩の意を表すために建てられたものです。ジャヤワルダナ前大統領は、この講和会議の演説に表記碑文のブッダの言葉を引用されました。そのパーリ語原文に即した経典の完訳は次の通りであります。『実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以ってしたならば、ついに怨みのやむことがない。怨みをすててこそやむ。これは永遠の真理である。』**

ジャヤワルダナ前大統領は、講和会議出席各国代表に向かって日本に対する寛容と愛情を説き、日本に対してスリランカ国(当時セイロン)は賠償請求を放棄することを宣言されました。さらに「アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要である」と強調して一部の国々の主張した日本分割案に真っ向から反対し、これらを退けられたのであります。今から40年前のことですが、当時、日本国民はこの演説に大いに励まされ、勇気づけられ、今日の平和と繁栄に連なる戦後復興の第一歩を踏み出したのです。今、除幕式が行われるこの石碑は、21世紀の日本を創り担う若い世代に贈る、慈悲と共生の理想を示す碑でもあります。この石碑から新しい平和な世界が生まれ得ることを確信します。

1991年(平成3年)4月28日 東京大学名誉教授 東方学院長 中村 元 謹誌】

私は仏教によって会社や国、人が救われた事例を見ると日本という国が聖徳太子の時代から仏教と出会い、文化や教育に溶け込んで、今も我々を支えてくれている柱の一つとしてあるのだと実感します。もっと仏教は学ばれて良い存在だと思いますし、我々を長きに渡り支えてくれている仏教という柱をこのまま無くしてしまって良いのですかと問いかけたくなるのです。